

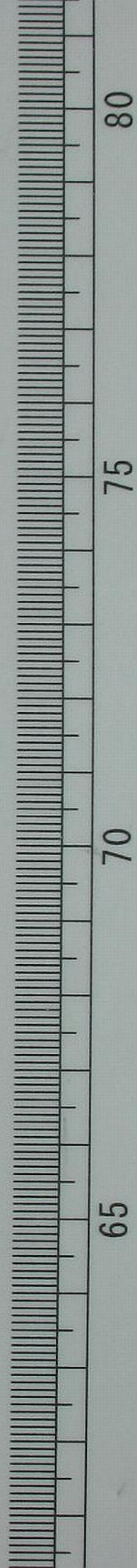


通俗

渡邊義方編輯  
日本小史

第拾編

下



65

70

75

80



A557  
20

通日本小史第拾編卷の下

東京

漆崎延房檢閲  
渡邊文京操觚

却つて説く奥州の國司北畠中納言顯家ハ去る元弘三年園城寺の合戦ニ比類なき大功を顯ハ一々れを帝御感斜あるを鎮守府の將軍ト成さく又奥州へぞ下されり其翌年官軍戦敗きて帝ハ花山の故宮ニ幽閉せり王ハ金崎ニ落城して義顯も自殺せりと聞えり顯家ニ附従ふ兵士も皆追々ニ落失せり

日本小史 第拾編下



勢ひ頓とん衰すい弱じやくの色いろを現あらわせり然しかるる後のち醍醐たご帝みかど吉野よしのの  
 潜ひそ幸しゆあり義貞よしかた威いと北國きたくにの振ふるふ由よし其そのの沙汰さた頻しばしばあり  
 うへ頭家あたまのいえ時とき来きりぬと喜よろこび廻まわ文ぶんを以もつて便宜べんぎの輩たぐひを召よ  
 集あめりらるる結城むすき宗廣むねひろ等ら六千餘よ騎きよて馳たせ加かり其その勢せ  
 三萬餘さんまんに騎よありりれば白川しろがわの関せきを打うち越こえ行いく奥州おくしゅう  
 五十四郡ごじゅうしよの兵へい等ら雲くもの如ごとくよ簇むらり来きり頓とんりり十萬餘じゆまんに騎よ  
 とありて其その勢せひ恰あたりり朝曦あさひの昇のぼるが如ごとく下野しもの國くに迄まで  
 打出うちだり鎌倉かまくらの管領くわんりやう足利あしひ義詮よしかたあまを聞きて自みづから武藏むさし  
 相摸まもの兵へい八萬餘はちまんに騎よを従したがへ利根川とねがわの岸きよ引ひ割きふく

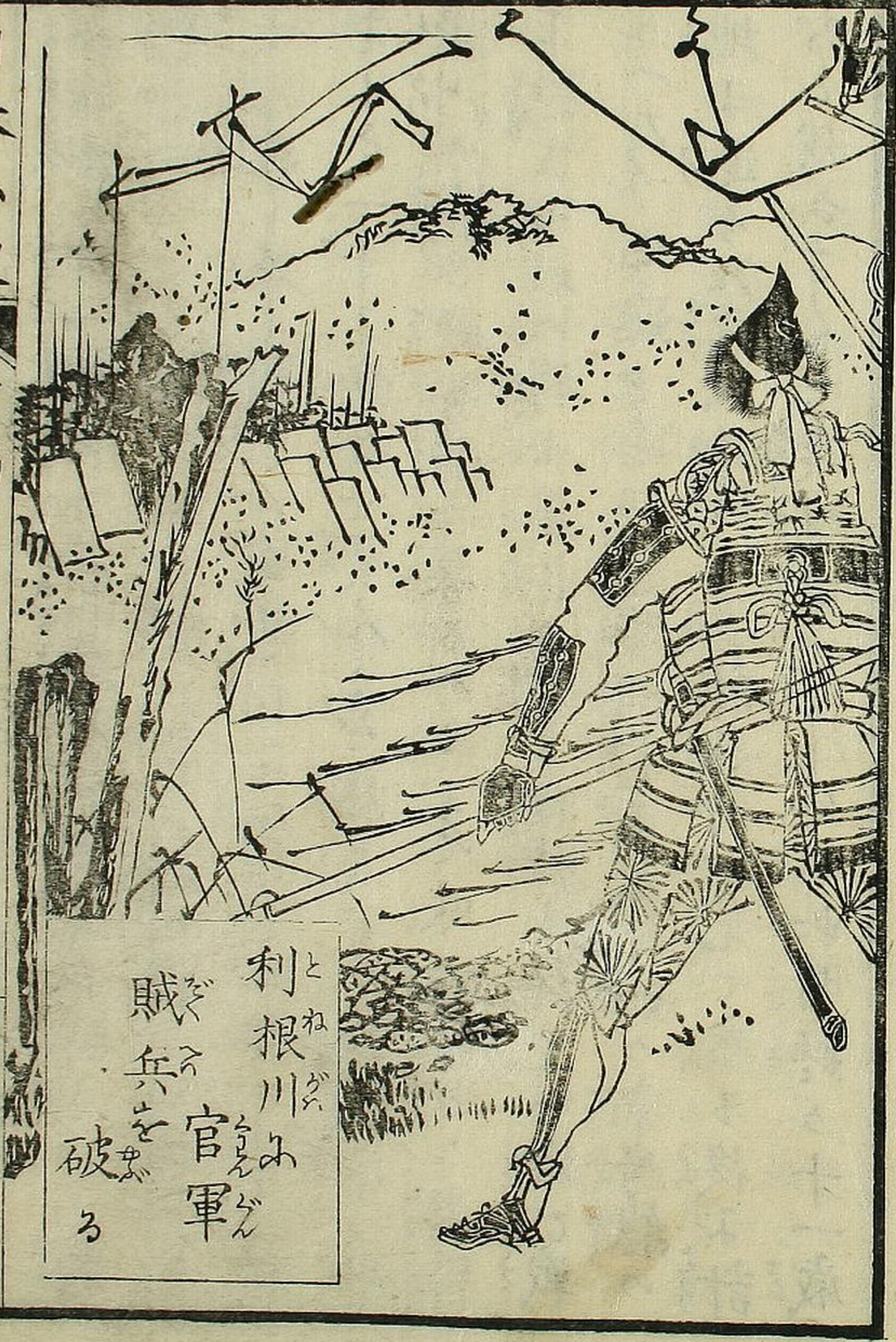
寄よ来きる敵てきと防まがんとり去さる程ほどよ兩陣りやうぢん川の兩岸りやうがんを相あ  
 持かりて渡わたるべき瀬せやりると見みてあまは折節せうせつ餘所よの  
 時雨しんぐよ水みづ増まて逆浪さかみ高たかく漲しげり落おち渡わたまへりももいいざ  
 れは兩軍りやうぐん水みづの落おちを待まち徒ひたらふ一晝夜いつしやを過すりり  
 爰こゝよ頭家あたまのいえの旗かた下くだふ長井ながい實永じゆつとり者ものり進すすみ出いて  
 申まをする古ふるより河かを隔へてたる軍いくさの亂ごして勝かち  
 と云いふまとまり假令たとへ此こ河水かみづ増またりとも宇治うぢ勢せ多おほま  
 へよも勝かちらど何程なんほどの事ことり候まをふべき敵てきよ先まだち打渡うちわた  
 して戦いくさひと決くわり候まをいんと思おもひ込こんで言いふれば頭家あたまのいえ



ちき我許しつる實永大よ喜びく馬の腹帶甲の緒と  
 あり身繕ひして打入とたり後よ續いて部井十郎高  
 木三郎馬を並べく同トく波間よ跳り入り我先ふと  
 進そなる味方の十萬餘騎これを見てアレ討る  
 と喊を作り一度よ馬を打入とる真一文字よ渡りけ  
 る鎌倉勢も是体を見て同トく河中よ打入とるが  
 先よ渡りたる奥州勢よ東の岸の流堰と西岸水迅き  
 こと矢の如く宛ぐり龍門三級りゅうもんさんきゅうの如くなれば鎌倉へ  
 先陣三千餘騎馬笈を押破られて浮つ沈る流を行

後陣の勢ハあまみ見えて叶ハトとや思ひらん河中より  
 引返して平野よ暫し支え居り乱立する軍なれ  
 ば右往左往よ懸散されく皆鎌倉へ引返して頭家利根  
 川の軍ふお勝ち勢ハ漸く強大ありと雖ども鎌倉よ  
 へ猶東八箇國の勢馳集りく雲霞のごとくなりと聞  
 えられ武藏の府よ五日逗留して竊よ鎌倉の様子  
 と窺ひつる所よ宇都宮公綱紀清西黨の兵千餘騎を  
 率めて馳加わり北條時行へ伊豆より起り五千餘騎  
 を以て足柄箱根の切所と堅め共よ鎌倉を責むべき





利根川官軍  
賊兵を破る





由頭家の方へ牒せらる。又義貞の次男徳壽丸ハ二萬餘騎を以て土野の國より起り直ち武藏の八間川まで押出し若し頭家の軍逢参らば及ばず自餘の勢を待たしとて一手は鎌倉を責んと謀りたる。鎌倉方ハ利根川の戦ひ敵勢益々募るの事ありて味方日々衰弱し趣きければ將士義詮の前より伺候し此上ハ縦ひ戦うへたりと雖も所詮勝利覚束まらじ如うト房總の地より退るる東ハヶ國の去就如何を見て然る後ハ計おと成るさんと衆議畧決せし処ハ此時纔十一歳

なる義詮ハ將士の評議を熟々と聞了り這ハ面々の言葉と覺えを勝敗ハ是兵家の常あり何ぞ一度敗れしとて漫ろし怖ろし夏やハ我斯て在ん限り一戦をせしむる者ハ踏止まり名を拳よと健我と志と同行する者ハ踏止まり名を拳よと健氣の言葉ハ諸大將誰か感激するべき皆討死と覺悟と定め敵兵今や寄るりと其勢都合一萬餘騎鎌倉中ハ楯籠る左と寄手の大將北畠頭家と始めと新田徳壽丸宇都宮公綱北條時行と將として其



勢總て十萬餘騎頃ハ延元二年十二月二十八日鎌倉  
 の四面より雲霞の如く攻寄り鎌倉勢ハ死力放出  
 して此を詮度と戦ふりのうら衆寡終に敵難く  
 杉下の岩打破きて寄手谷々み乱入る勢ひ積水と  
 決したる如くまれを鎌倉勢散々み打敗られ辛く大  
 將義詮を助け漸く一方の血路を開き何処とも  
 く落失たり斯りなれば頭家の勢ひ日と追て盛ん  
 よあり明れば延元三年正月八日鎌倉と立て夜と日  
 み亞ぎ京師と差して進發るまよ風と望んで降る者

日々よ加り其勢五十萬騎と聞え前陣已も尾  
 張の勢田ま心来り一時摂津大宮司入道源雄五百余  
 騎も馳付け美濃より堀口貞満千餘騎も馳加  
 へる夫より美濃國洲侯へ着くべ馳加へる者益々  
 多く六十萬騎先を急いで只一撃も尊氏と京師の外  
 へ追拂とんと勢ひ込んで進み又鎌倉の軍  
 よ打負けたる義詮幕下の大將等各敗兵を集めり頭  
 家の後と慕ひ京師の後詰として押寄るみ江戸葛  
 西三浦鎌倉坂東の八平氏武藏の七黨三万餘騎よて



馳來る又清の黨旗頭芳賀八道禪可も千餘騎と率一  
て馳加り美濃の洲俣にて土岐賴遠が七百餘騎み  
て來るに逢ひ其勢積つて八萬餘騎猶も敵をば追行  
ぬ去る程に頭家等の兵に垂井赤坂の邊に來りけ  
る時後より追來る敵ありと見て多れば先此敵を追  
拂えんと三里餘り引退る野に滿ち山に蔓りて敵  
の來るを待りけたり透もろくせむ土岐等の兵に揉  
よ揉で追掛來り磯辺の岩に白波の中つて碎くる勢  
ひろて兩勢礮地と行合つて霎時が程に八乱とく互

ひよ一足も退くも命を涯に相戦ふ毗嵐断て大地忽  
ちらふ無間獄に墮ち水輪湧て世界悉く有頂天に翻  
ぐらんも斯やと思ふをうらみ左れとて敵の目  
に餘る大軍あるを斬まども突ども些も怯まむ新し  
と入る攻立たれば左も勇ましく鎌倉勢遂に散  
々よ打負て思ひくよ落失り却説京都よて八頭  
家上洛の由先立て聞えられども土岐美濃國に在る  
くく一支配の支ゆるるんと賴母一く思ひ居る  
よ敵鋒なるるに鋭くく賴遠青野原の戦争に敗れ

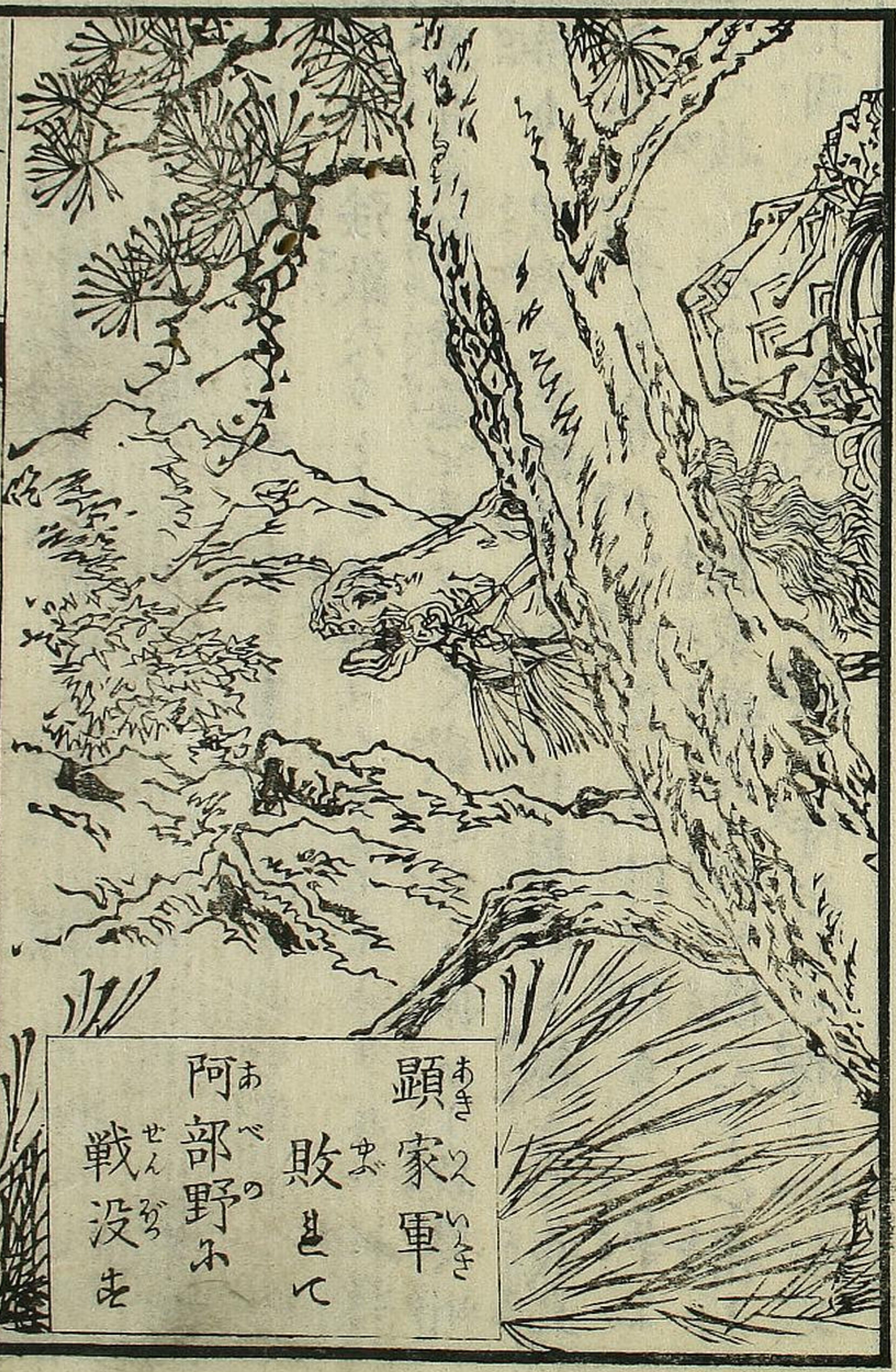
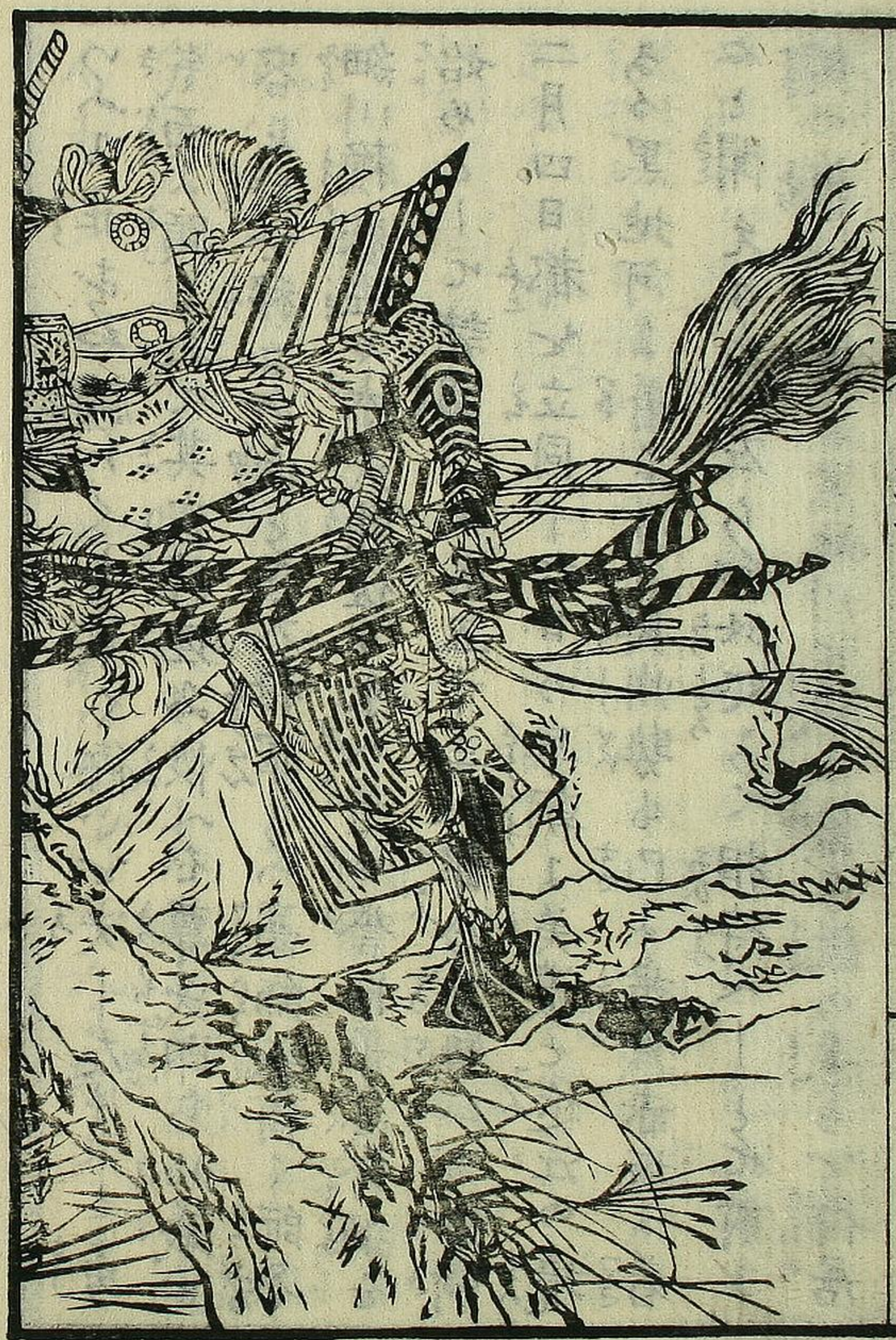
日本書紀  
一編



行方知とあるありと聞えしと洛中の周章一方を  
らぞ宇治瀨多の橋と曳て敵を待べき一先西國小  
引退のく四國九州の兵と募り再挙の沙汰小及ぶべ  
きやと評議區々分きて衆議いませ一決せざる處  
は高師泰進と出でて申しつるは某古今の例と案を  
るふ未と敵と宇治勢多は拒いで勝利を得たること  
候は斯る不吉の例は倣はんより先づ此方より馳  
向ひ戦ひ江濃の間み決まらるゝ如き兵法も先  
んぢれば人と制し後られば却りて人と制せらるると

つゝは非ぢや願はくも早く御心と決したまふと勇  
気面より願をれて其言辞理み悞へを尊氏即ち此議と  
容是時と移さば向とを大將軍より高師泰同く師冬  
細川頼春佐々木氏頼佐々木入道々誉同子息秀綱を  
始めとして諸國の大名五十三人都合其勢一万餘騎  
二月四日都を立同ト六日の早朝は美濃と近江の境  
ある黒地河は着より奥州勢も已は垂井赤坂は着  
ぬと聞えられれば左らば此処まで相待べしとて前よ  
関の藤川と控え黒地川と後よ當て敵の来ると待居





顯家軍  
 敗北  
 阿部野  
 戦没



ころハ往昔韓信が用ゐる背水の陣の知られけ  
 る左れば奥州勢へ垂井赤坂青野原も充満して東西  
 六里南北三里も陣を張り篝火の光り天を焦して如  
 何ある強敵たりとも挫ぐべくぞ見えたりころ此時  
 義貞義助北陸道を順がへく威近國も振ひ一故奥州  
 勢の黒地の軍難儀も及び北越前も趣きて義貞  
 の兵と一手ふあり力と合せて京師を攻め一挙に  
 して抜く金うり一頭家義貞の功と樹んことを猜こ  
 北國へも引くを黒地とも破り得て俄に伊勢よ

り吉野へ廻り一ハ浅猿一うりころ次第あり斯く頭  
 家へ兵を引いて南都も入り暫時汗馬の足を休めろ  
 諸將の意見を聞ころふ白河の結城入道進と出で  
 申しころハ此度吾軍所々の戦ひ小勝利を得一ふい  
 さう青野原も利を失ふ一とて黒地の橋をも渡  
 り得て此終吉野へ参らんハ如何あり互しく京師  
 へ攻上りて一挙に敵を逐落せり左もくハ潔よく  
 尸を王城の土も埋んと頭家尤もと同日其準備頻り  
 あり此事早くも京師も聞え一ハ尊氏駭くこと



一方多しを將士を集めて謀略を議を諸將誰かの  
我向をんと云ふ者多く座中白けて見えたりを  
師直尊氏と謂て曰く此敵を破らん者の桃井兄弟  
の外は候をト宜しく兩人の命ト玉に敵の長途  
よ勞きたる故一戦して即ち敗れんと尊氏聞て大いに  
喜び急ぎ使を以て直信直常と命トされば兩  
人命を受けて其日の内に出立ち南都を差して進發を  
頭家討手の寄ると聞き般若坂の陣と張りて敵  
の來ると待居たり直常身を挺して馬を陣頭に乗

出我等兄弟此度諸人の中より拔擢せしは大切の  
討手を蒙る事弓矢の面目此上なき若し此一戦は  
利を失ふひまが度々の戦功の皆烏有み帰せん志  
を一より者共敵を敗れやと大音声み呼なれは迅  
り雄の精兵七百餘騎馬と並べ真一文字の面を振  
らて喚き叫んで突入たり奥州勢も爰を先途と死力  
を出して支えりども長途を勞き一更なれば墓々  
敷に働らた得て一陣二陣と乱を立ちて終に總崩と  
崩立立ち思ひくも逃走を直信直常に思ふ俣み



敵よりち勝ち軍を引て京師より歸る。顯家ハ舎弟顯信  
 と敗兵を集め和泉の境まで打出て近隣を犯し掠め  
 八幡山は本陣を構へて再び京師を犯す。勢ひを  
 りりて師直自ら兵を將として八幡山の城際まで  
 取詰る。左ととも要害の切所をば寄手戦ふ。毎  
 り利を失ふ。由早くも京師より聞えし。うへ桃井兄弟  
 再び兵を引て馳加たり。一日一夜息をほげせむ。最  
 も手痛く攻戦り。城兵心をうり。強々れども身金  
 鉄よりうざれを遂に寄手の大軍に敵まう。あとな

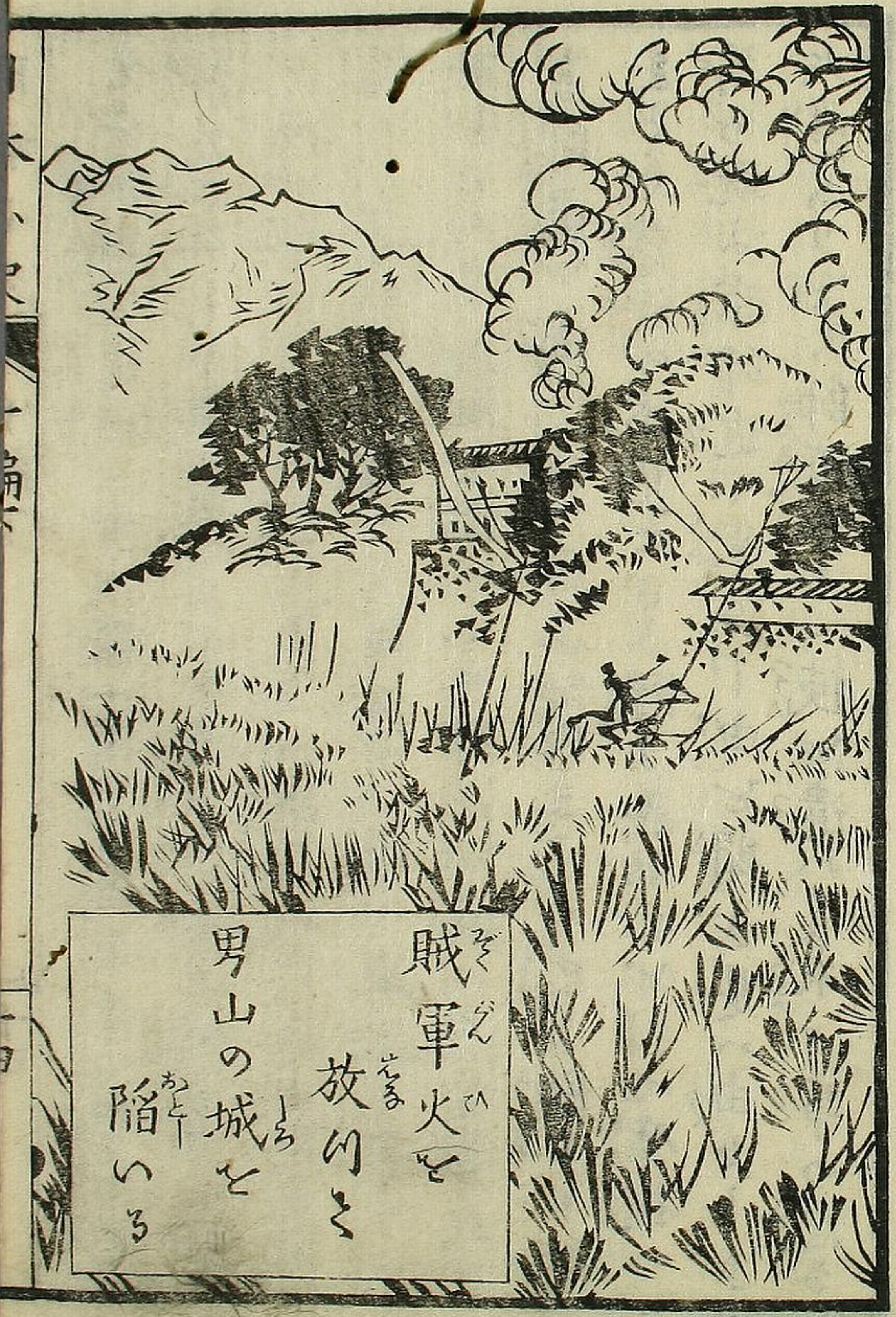
八幡山を没落を顯家の吉野の方へ走らんと僅  
 う二十餘騎を左右より從ぐ。圍を突くと逃を出て安  
 部野まで落延し。遂に追兵の為を討取らる。時延  
 元三年五月二十二日。顯家年二十有一。此事世間聞  
 え。なれば。可惜勇將を失ふ。ひいと。懐まぬ人々。と。あろ  
 くら。却つて。説く。新田義貞ハ先は北國七十餘城を  
 攻取り。其勢ひ強大より。うへ。足利高經。黒丸の城に  
 在つて。稍敗兵を集め。うへ。先づ。此城を攻め。落さる  
 と。義貞。自り。六千餘騎を從ぐ。黒丸の城より。向



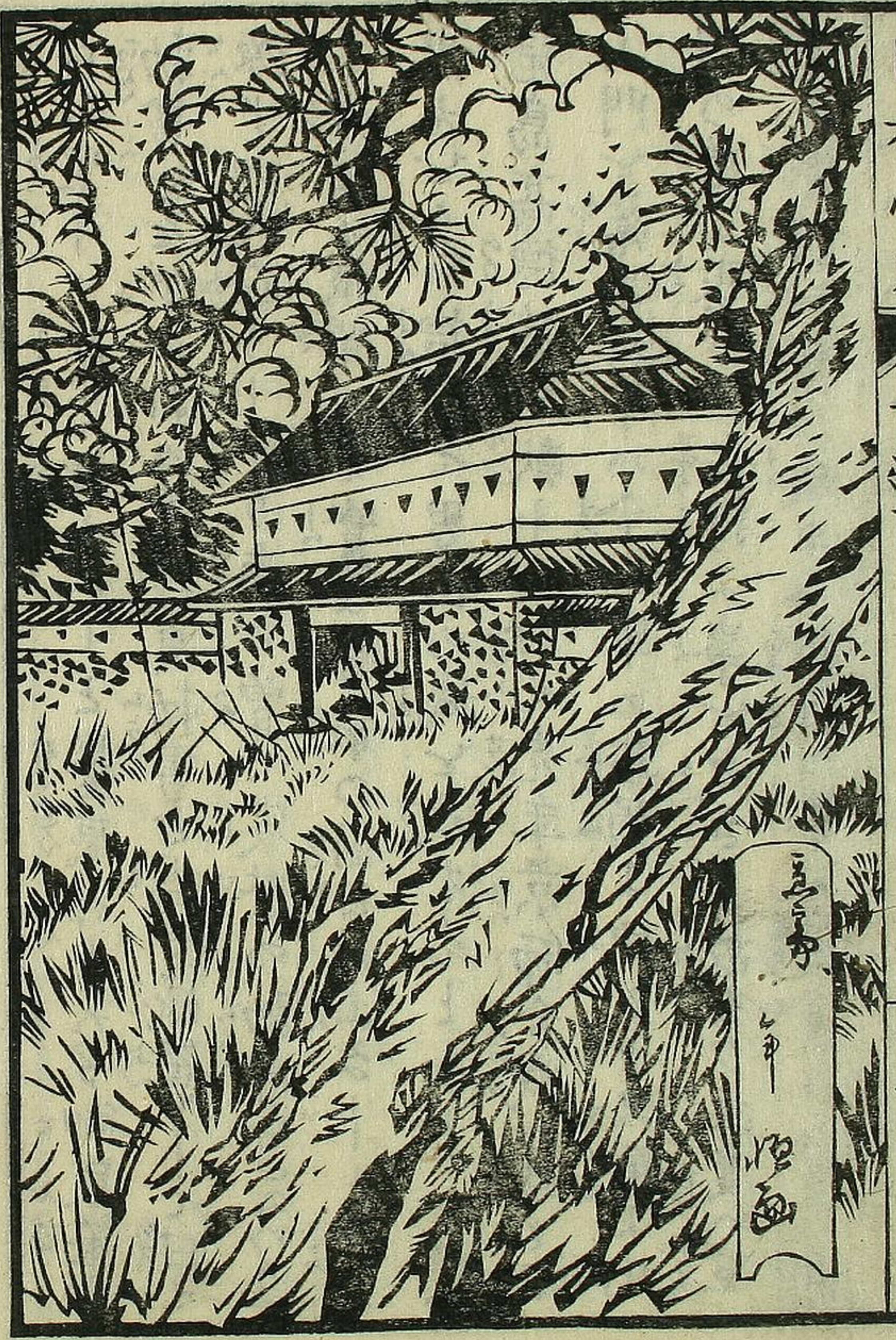
へはるる時、大井田氏経等越後の兵二万餘騎と  
 發し、普門富樫の二氏を破り来つて、義貞ふ合を、美貞  
 大い喜び、越前の河合に至る兵来り集る者まさく  
 多し。此勢ひに乗じて一挙に黒丸の城を拔りんと城  
 攻の準備等開ありき。所は芳野殿より勅使を立ら  
 せ、今義貞、眞頭、信敗兵を集めて、男山の城に在り、洛中の  
 逆徒數を尽して、あまた、城、中、食、乏しく、兵、乏、疲  
 る北兵上洛の期近きふ在りと聞て、士卒梅酸の渴と  
 忍ぶ。今若し急に救へざれば、枯魚と市み訪ふの悔あ

らん、空しく速に救ふべしと、墨痕林りたる御宸筆の  
 勅書とを下され、義貞勅書と得て感奮、一て曰く  
 源平両氏、在りしより未だ曾て宸筆の勅書とあるり  
 一者、ゆるげ聞うぞ、實に當家の面目、此上ありと急し  
 黒丸とらち捨置て、男山の城と救をんとる。一これば  
 兒島、高德、策と献して曰く、先年京師合戦の時、方  
 山門と落されし、今全く軍の強弱に依らざる、只敵に北  
 國の道と塞ぐは、兵糧の事と欠き、故あり、此度、空  
 しく越前加賀の城々へ宗徒の勢と、籠置きたまひ絶





賊軍火を  
 放り  
 男山の城を  
 陥る



馬場  
 甲  
 西  
 海

田  
 本  
 山  
 一  
 緒

三



えむ兵糧と運送させ大將一兩人は六七千の勢と差  
 副え山門の本陣と構え日々夜々京都を攻上らば是  
 根と深ふ一帯と堅ふまゝの謀畧ありと義貞あき  
 聞て尤もと同ト自う兵三千と以て高経は備へ二  
 方をのり義助は附いて男山を救へむ尊氏の  
 高師直を遣へて男山を囲まらば已に數日と経  
 せども落城の体見えざる所は義助兵を引て應援の  
 為り既よ京師近く来りし由を聞き是は由々しき  
 大事ありと師直の方へ使を遣へし未だ事の急を

らぬ先は男山の合戦を聞き急ぎ京師へ歸りて北國  
 の勢と相待べき旨を命トり師直事の急あると知  
 り或る夜風雨の激しき乗ト人々城内に忍をせし  
 火を神殿に放ししむ思ひ設けぬ事なれば城中の騒  
 動大方ありお各々濃煙のうちに迷倒を寄手煙りの  
 上り城暗号は齊しく城は攀ち登り既よ一二の木  
 戸を攻入つたり顯信五百余騎を率わて込に入る  
 敵を拒ぎしが遂に餘り少く討做され河内の國  
 へ引退ぞく義助へ已に敦賀まで来りしが男山落ぬ



と聞きく今いまも京師きやうしへ上のぼるとも其詮そのせん多おほくして再び  
 兵へいを旋くるく義貞よしかげ再び義助よしかすけと合あひ兵へいと河合かひの庄しやうへ  
 進すすめ先まづ足羽あしはの城しやうを攻せめんと高經たかのりも後聞のちきこて  
 謂いわへらく今味方いまかた三百さんひゃくの小勢せうぜいとの向むかひ三萬餘騎さんまんにやくきの大  
 敵てきに當あらば万まよ一毛勝いちもうしょうあつとわく然しかりして敵諸方てきしよかた  
 の道みちと塞ふさぎなれば何処どこより逃のがれ出いづべき只此上ただこのみづかみ  
 と死しを決かして堅かく城しやうを守まもるふ如ごとく牆かべと高たかく濠ほ  
 を深ふかく深田ふかたの水みづを引ひき入いりて馬うまの足あしを立たさせを防かぎ  
 戦いくさの用意ようい等閑おんかんあらず却説かへしていふ義貞よしかげの三萬餘騎さんまんにやくきの燈明とうめい

寺てらの前まへまで進すすみ来きり此処このところは本陣ほんじんと構かまへてあまのり  
 敵城てきじやうを攻せめ掛からんと先まづ兵へいと七手ななては分わかち敵てきの七城ななじやう  
 よ向むかひむ中ちゆうみも平泉寺へいせんじの僧徒そうとの籠かごりたる藤嶋ふじま  
 の城しやうに敵強てきかうくして味方かた屢々しばしば負色まひいろと現あらわれれば義  
 貞よしかげへ本陣ほんじんは在あるあまの後聞のちきこき安やすうらざるふ事ことふ思おも  
 ひ自みづから五十餘騎ごじやくきの勢せうを従したがひ小路せうじよりして藤嶋ふじま  
 の城しやうを向むかはれり時ときは誰たれとも知しらざる二人ふにんの大將たいしやう  
 三百餘騎さんひゃくきの兵へいを引ひて横合よこあひより義貞よしかげの兵へいを奄殺えんせつせ是  
 藤嶋ふじまの城しやうを救すくはんとて黒丸くろまるの城しやうより来きり兵共へいども



あり義貞の兵と中ふ取あめ矢を放つあし雨より毛  
 繁し中野宗昌義貞ふ云つと曰く千鈞の弩ハ麒麟の  
 為る機と發せむ君今輕々く死し玉ふあし勿れ獨  
 り速やうみ逃し玉へと義貞肯んぜざして曰く士城  
 失ふて獨り免うては是れ大丈夫の所為よあしと  
 馬を驅て敵中よ突て入りしが馬五筋まで矢を受し  
 うべさしもの名馬も堪り得を宛みながら屏風と倒を  
 如く岸の下よて轉びりる義貞左手の足とありとさ  
 起上らんとあしとる時何処よりり来りりる白羽の

矢一筋飛来つる眉間とハツシと射さうける矢所の  
 痛手ふさしその義貞眼眩め心乱と今ハ叶ハトと  
 や思ひりん太刀を左手よ取直し自りり首と搔切て  
 深田の中へ藏し置き三十一と一期として其後横よ  
 倒るる勇士の最期ハ勇士とれ越中の住人氏家  
 重國遙くふあしと見えて走り来り首を取つて鋒先ふ  
 差貫ぬた黒丸の城よ馳せ帰る義貞の郎黨等ハ猶  
 も敵と戦ひ居しが大将已よ討とぬと見て一同馬よ  
 り飛んで下り義貞が死骸の前よ跪きて腹搔切て



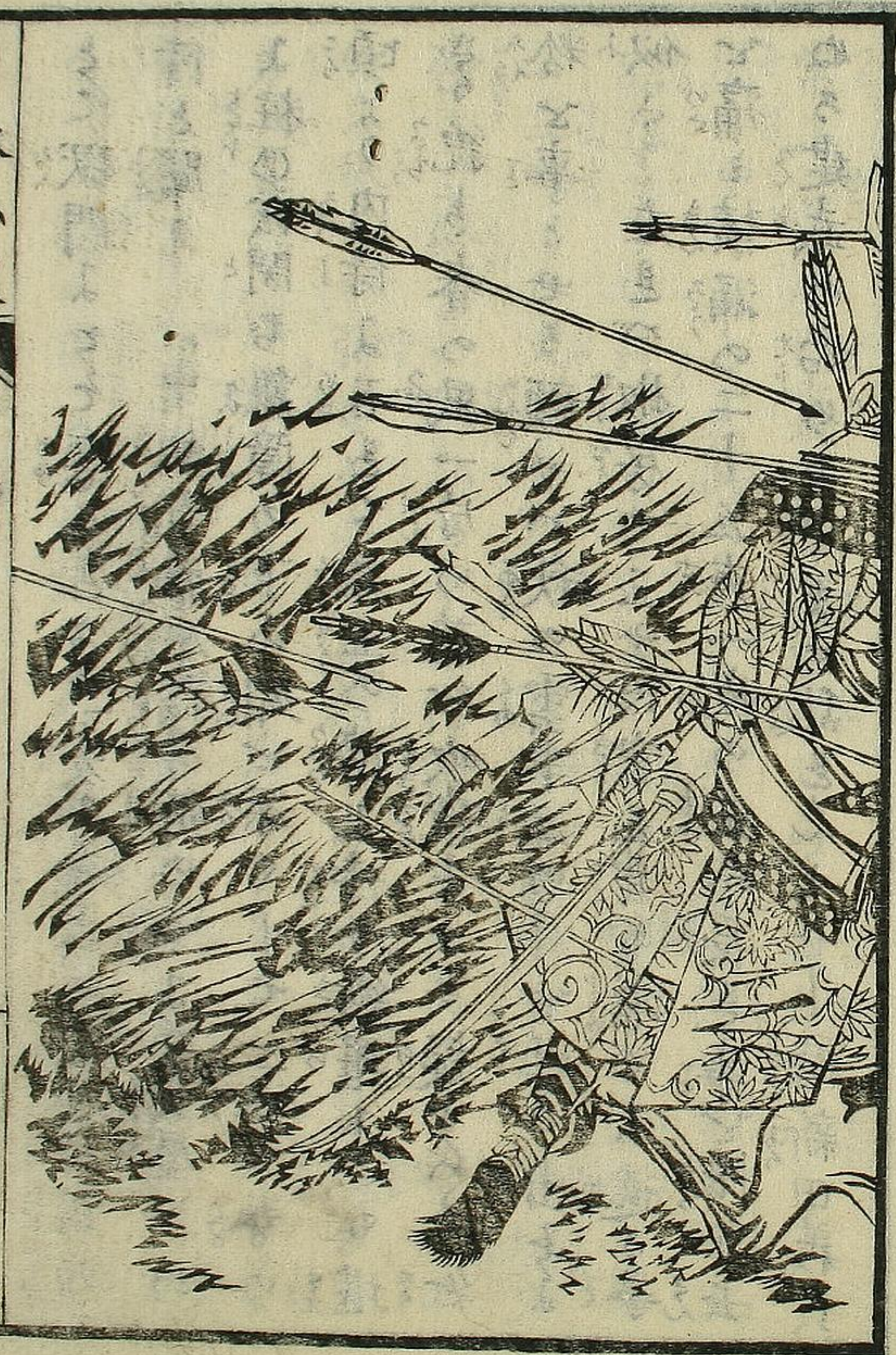
重なり伏を嗟義貞南朝股肱の臣と一く其身の勤む  
 多たと打忘を輕々しく矢石を冒して終に空しく戦  
 場の露と消え一へ南朝衰運の致を処し謂まが  
 薄情りりる事多あり軍終りて氏家重國ハ義貞  
 の首と携へく高經の前に至り某此度の戦ひは名字  
 誰とも知り候へ糸とも甲冑の模様も察し候へ  
 ば尋常の武者と覺え候りぬ一人の大將の首と取て  
 候らへ御實檢下さる座一とて死人の肌は着る金  
 襪の守と共に血塗とる首とぞ差出りける高經

熟々あはれ見ると義貞の顔ふ髣髴さるる其者  
 の帯たる二口の太刀と取寄せて見るよ何れも金銀  
 と延て飾り装ひ一口の銀もて鬼切の文字と顯へ  
 一口の鬼丸とぞせり是は皆源氏重代の  
 重寶をれを必定義貞もて有らんおとんと猶も守  
 袋の中と改まらるる後醍醐帝の御震筆も朝  
 敵征伐事慮所向偏在義貞武功云々とありし  
 ぞ備へ義貞の首も相違さるとて朱の唐櫃よあま  
 入と尊氏の方へ送りたれを朝敵の最武敵の雄あり





足羽城外あしはね  
 義貞流矢よしのり  
 小中おなかつ





とて獄門よとを懸らしきるる「爰ふ義貞の夫人勾當内侍と聞えし中納言藤原行房卿の女もて金屋の内」粧ひ成閉ち雞障の下小媚と深くして二八の春の頃より内侍よ召きて君王の傍に侍り綺羅もども堪きり貌も春の風一片の花と吹残まうと疑ぐはき紅粉と事とせる顔せし秋の雲半江の月と吐き出まよ似たり左とべ椒房の三十六宮五雲の漸くよ遠る事と痛と禁漏の二十五声一夜の正ふ長き事と恨む去ぬる建武の始め天下もて乱さんとせし時新田義貞

常ふ召とて内裏の警衛を命せらるる或夜月冷まりく風冷やうあらし此の勾當内侍半簾と捲て琴と弾ト給ひたり中將その音声よ心引き覚を禁庭の月よ立吟らひ文多く心漫らふ浮岩までそれば唐垣の傍よ立給まで伺ひたり後内侍見る人あうと物侘しげお琴と弾おありぬ夜痛く深て有明の月隈多く差入きたるふ類ひまをやは流らりらめと打詠め萎き伏したる気色の折らば落ぬべき萩の露拾つ消はん玉篠の電よう尚仇あれば中将行末も知らぬ道



迷ひぬる心地にて帰る方も定らるるを淑景舎の  
 傍に休らひ兼て立明を朝より夙に帰りても風あり  
 一面影の猶あ許は在る心迷ひは世の態人の去ひ  
 交は事も心の外なれば何時となく起もせを寝もせ  
 夜と明一日と暮して若嚮道ある海人なほ有らば  
 忘は草の生ふと去ふ浦の邊も尋ね行なまらばと漫  
 ろみ思ひ沈みたり餘り詮方あるも小媒まをま  
 人と尋ね出して戦とむらう紙知らるるき風の便り  
 の下花の穂は出るまをへみくとせとせ

我袖の泪は宿る影とぞふ  
 知らで雲井の月やまむらうん  
 と詠て遣はされたりければ君の聞し召されん事  
 も憚りたりとて世は憐れげある気色は見えるが  
 手ふども觸は玉を燈と使帰つて語りければ中將い  
 とお思ひ萎して云ふべき方なく在ると憑との命と  
 も覚えむありぬべきを何人う奏しらん帝等聞き  
 むと聞し召て夷心の辨方なきよ思ひ深らるるも理り  
 ありと哀なる事ふ思し召されば御遊の御次

日本小史 一編 廿一



左中將を召され玉ひ御酒を賜ふとて勾當の内侍  
とば此盃に付属てとぞ仰せ出されり義貞限り  
く喜び君恩の忝多たを謝し申して其日の御前を退  
ぞねる次の夜聴て牛車鮮明ふ仕立て角と案内せ  
させたるふ内侍もちや此年月の志し誘ふ水あ  
をと思ひりるふや左のみ深け過ぬ程は車の軌る音  
して中門は轅を指廻せば侍兒一人二人妻戸をさし  
隠して驚破めたるり中將は此幾年と戀忍ひと相  
逢ふ今の心のうち優曇華の春待ち得たる心地し

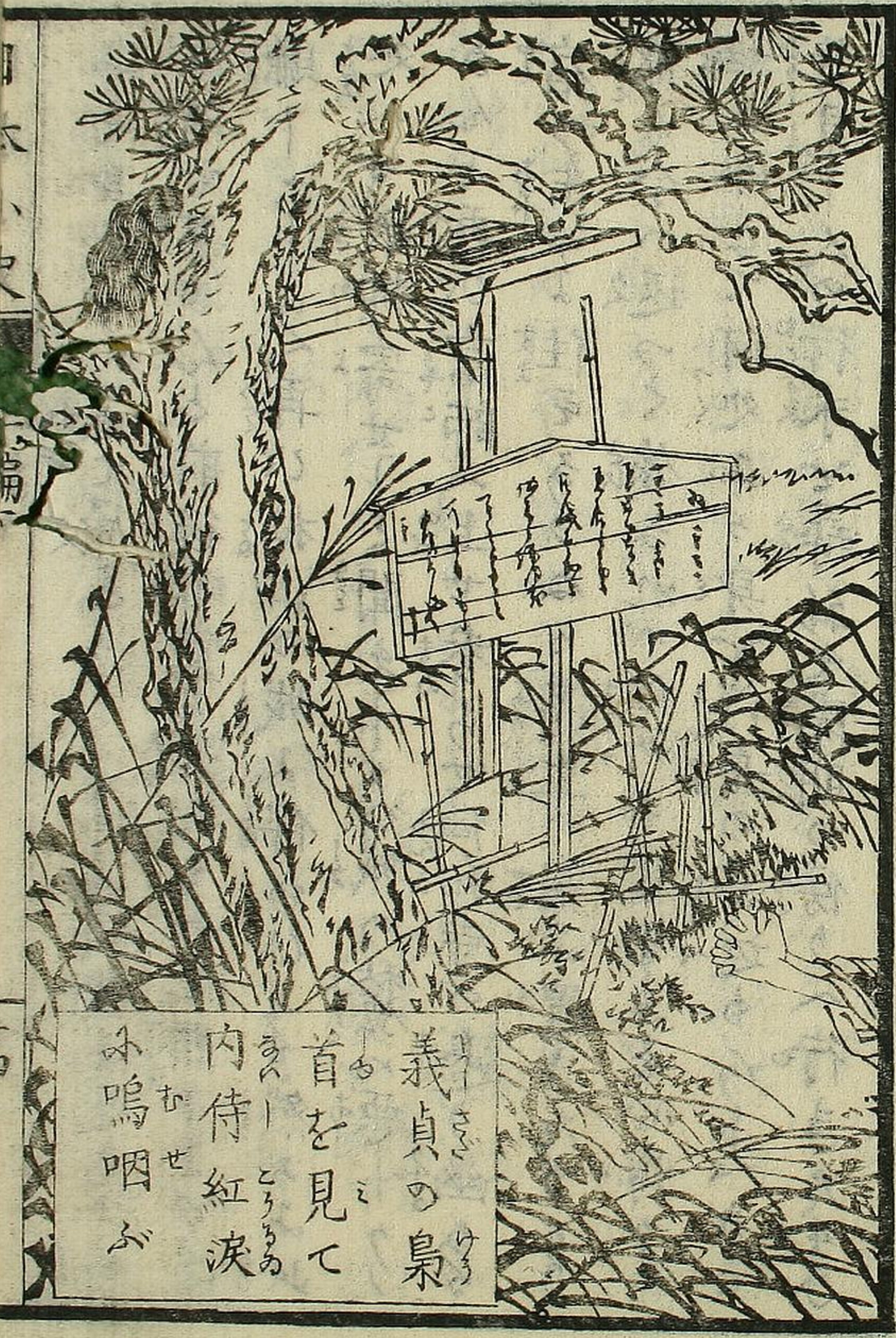
て珊瑚の樹の上は陽臺の夢長く覚め連理の枝の頭  
りふ驪山の花自り濃うあり文なく迷ふ心の道諫  
むる人もなうりうば去る建武の軍ふも忽ち兵  
機と失ふとく虎と深林は放つの過失を為去程ふ  
義貞攻本の軍破は北國へ落るる時の路次の難美を  
慮りて内侍と堅田の里に留め置き涙は袖を分ち  
る内侍は京都近き海人の磯屋ふ列を離れし秋雁  
の思ひをましく思ひぬ光陰を送り玉ふうちふも今  
や敵ふ搜し出されて如何なる憂目を見る事やうん



と思ひたまふに朝夕安き御心なく世をのちたなく  
 暮したまふうち父行房朝臣金崎にて討きたまひぬ  
 と聞えしうが思ひの上より悲哀を添えて明日まで  
 の命もよりや何うせんと嘆き沈たまひしが有繫  
 消ぬ露の身なれば起居ふ袖を千代て二年餘り  
 ふありふり里義貞へ越前ふ下り着し日より頃て迎  
 ひ飯上せむやと思ひたれども道の程も輒うろむ人  
 目の関を毛憚りて其俣よりて打過しが其秋の始め  
 ふ今ハ道の程も暫らく静ふ成ぬまばとて迎ひの

人を上せし松山の城より引取りたる内侍松山より着き  
 たまひし頃義貞足羽の城より向されし後なれば輿  
 の輦の輦トて浅津の橋を渡りたまふ処より瓜生照百  
 騎をりの兵と引て行合ひりるが馬より下りて輿  
 の前ふ平伏し新田殿より昨日の暮ふ足羽の城より  
 討きたまひしと云ひし涙と潜然と流しなれば内侍  
 はあはれ聞きたまひて這へ如何ふ浅猿やと胸塞が  
 り肝消て中々涙も落やらむ輿の中より伏し沈むて切て  
 ハ適は其人の討きたまひはらん野原の草の露の底





義貞の梟  
 首を見て  
 内侍紅淚  
 小鳴咽ふ



日本書紀  
 卷之八  
 孝德天皇  
 二十二年

七三



身を身を置き置て歸りさのみ後と先立共  
 消も果ると前後不覺泣たまふを照さまぐみ  
 賺しあらし再び杉山の城に伴ひけり然るふ此  
 処も敵押寄せと聞えけり城の麓へ悪く  
 んと再び京師へ上せ参らせ仁和寺の邊り幽る  
 宿の生ぐま住せありぬる蓬生の宿ふ置きたり  
 都も今の返つて旅されば住所も定まらざ心浮き  
 袖あふきて何処ふり身と浮舟の寄辺ゆらぐきと  
 昔見一人の行末と尋ねて陽明の傍りへ行きたまひ

路不人数多立聚へを何事あると見たまふ  
 越路遙遠に尋ね行きて逢て帰りに義貞の首と獄  
 門の木に懸られり内侍へ一目見給ふより眼も昏  
 き心も消え行きて築地の陰に伏し沈きヨ、とむら  
 み泣たまふ知るも知らぬものと見て涙と流さぬ  
 ひまうりなる内侍へまきより翠の黒髪を剃下し紅  
 顔と墨染し変りて或る道場に入りたまひ暫しが  
 程はるまき面影を身よ添えて泣悲し給ひしが會者  
 定離の理り愛別離古の夢と覺し厭離穢土の心を



日々ひび進すすむを欣こころ喜よろこぶべくを念ねん時とき々々増ますまらればさがさがの  
 奥おく往むかひの院いんのう造ぞうりあるの柴しばのい扉ひらふ明暮くをあらましますを  
 てあらましますの心こころの中なかをあらましますを

俗通 日本小史第十編卷の下終

版權 明治十四年四月三十日  
 免許 同十七年八月出版

編輯人

渡邊 義方

大阪府平民

日本橋區濱町三丁目  
 吉番地寄留

東京府平民

出版人

辻岡 文助

同區横山町三丁目  
 二番地



